



帝国日本の旅券制度と渡航実態

「徳川時代の日本は『鎖国』をしていた」という言説には、過去2-30年の間に様々な批判的検討が加えられてきた。しかし一方で、徳川政権下では1866年まで日本人の海外渡航が一般的には禁止され、明治期が始まるまでは海外渡航者はごく限られた例外に留まっていたのも事実である。しかしそれからの数十年で日本人旅行者・移民は世界各国に散らばり、1945年の敗戦時点では文民・兵士合わせておよそ600万人が日本列島の外にいた。こうした外への移動は日本の植民地支配の拡大とともに進展したと言えるが、常に片道一回限りの動きだったわけではない。本国の近くに植民地を持ったこともあって、多くの日本人移住民は同時に移動民でもあった。本発表では旅券制度の発展と旅券申請記録等の分析を通じて、20世紀前半の帝国日本内外の境界を超えた移動の過程がどのような法体系と制度により規制され、またそれらがいかに履行されたかに注目する。